

子どもも教師も発達する!! 健康教育の授業づくり

上野山小百合（東大阪市立龍華小）

1. 今年水俣を訪ねて学んだこと
2. 5年生での水俣病の実践
3. 発達研究と子ども理解

1. 今年水俣を訪ねて学んだこと

今年9月、埼玉支部の平野さんが、ゼミ生と太鼓集団「響」の方々と水俣に行かれるというので、一緒に行かせてもらいました。

水俣病は5年生で2回実践をし、同志会で授業作りの学習会をしたりしてきましたが、実際に水俣に行ったことはありませんでした。原発の授業では福島で取材したことを授業に取り入れてきましたが、水俣病の授業では、現地を訪れたことがなく、原田正純さんなどの文献(1)(2)を読んで教材研究をしたり、高校生に授業をされていた同志会の平野さんや成瀬さんに学んだりして、授業づくりをしてきました。

「百聞は一見にしかず」の通り、行ってみてわかったことがたくさんあり、貴重な体験



相思社の集会室で夕食交流会

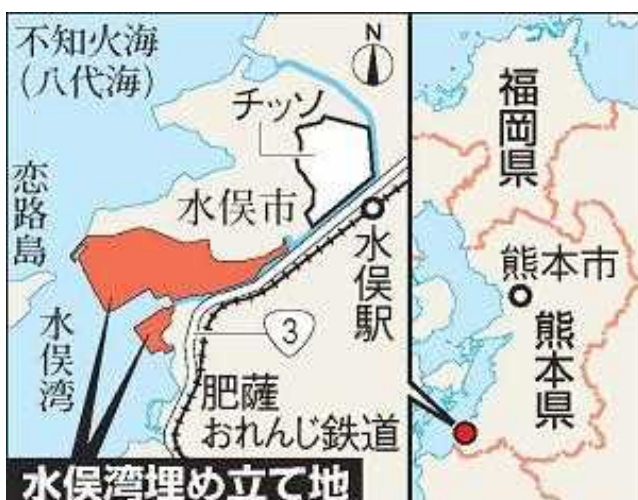
をさせてもらいました。学んだことを少しでも皆さんに伝えたいと思い報告します。

全員で18名でした。全日程4日中私は3日目までの参加でしたが、とても濃い3日間でした。平野さんが、これまでに何度も水俣に行かれて交流されている患者さんや支援者の方々のお話を聞いたり、相思社の方の案内で水俣市内を回って解説してもらったりしました。学生さんたちや「響」の方たちとの交流から学んだこともたくさんありました。

相思社は、水俣病患者さんを支援し、水俣病の真実と意味を伝える活動などをされています。水俣病を学びに来た学生の宿泊所でもあります。詳しくは、相思社のHPをごらんください。

(1) 水俣市立資料館と水俣病歴史考証館

熊本県では、水俣病を正しく理解するために公費で小中学生対象の社会見学を実施しています。体育同志会でも熊本支部の若い先生がその実践の報告をされました。子どもたち



は貸し切りバスで来て、まず水俣市立水俣病資料館を訪れるようです。資料館は、メチル水銀のヘドロを埋め立てた広大な土地（水俣エコパーク）の西の方、海に近いところに建っています。水俣病に関する資料がたくさん展示され、短いビデオを見たり、語り部の方の講演を聴くことができます。とても詳しく、きれいに展示されていました。情報量が多く小学生には難しい資料も多かったのですが、感覚障害を体験できるコーナーなど小学生にもわかりやすく工夫されているところもありました。でも、じっくり見ているうちに違和感を覚えました。「魚（いお）湧く海」と言われ、魚介類が豊富にとれた水俣湾と人々の暮らし。そこにやってきたチッソ工場と水俣市の歴史。水俣病の事実や原因…それぞれ詳しく解説されているけれども、それぞれの立場を考えて、加害－被害の関係や住民運動、認定や補償の問題などの部分が見えてこなくて、水俣病が過去のことでもう終わったこと、きれいごとになっているような気がしました。



水俣市立水俣病資料館

一方水俣病センター相思社の「水俣病歴史考証館」は、水俣病関係の所蔵資料は約22万点で国内最多だそうです。相思社内にある考証館は、山手の細い坂道を登っていったところにあり、建物は鉄骨平屋で広さ約230平方メートルの質素な資料館です。患者さんや支援者が働いていたキノコ栽培工場を改修し、国が「水俣病の原因はチッソの排水に含まれたメチル水銀」と断定した公害認定から

20年後の1988年に開館しました。2018年2月に亡くなった石牟礼（いしむれ）道子さんから寄贈された『苦海浄土（くかいじょうど）』の直筆原稿や、石牟礼さんが考案し患者運動で翻った「怨」の黒旗、かつての漁民の暮らしを伝える木造船や漁具、チッソの工場廃水を与えたネコが発病した「猫実験小屋」、百間（ひゃっけん）排水溝のヘドロを瓶詰めにしたもの、葉書などの実物がぐっと訴えてきました。入ったとたん、水俣市立資料館との違いを感じました。被害者・住民の立場から資料を見て、水俣病について考えることができました。

（2）水俣の穏やかな海



穏やかな不知火海（しらぬいかい）

市立資料館の屋上から見た水俣湾も不知火海もとても穏やかで静かな海で、夕暮れの景色がとても美しかったです。

案内して下さった相思社の葛西さんの話では、不知火海はリアス式海岸だけれども島々に囲まれていてほぼ湖のような穏やかな海で、白波が立つことはないそうです。驚いたのは、潮位の差が4メートルもあり、満潮になると海水が水俣川を逆流するそうです。前日に水俣川のすぐ前にある市民会館に行き、着いたときと帰る時、川の流れが逆なのが不思議だったので謎が解けました。水俣のまわりの海は、昔から魚が生息しやすい環境だったことがわかりました。そんな美しい自然がチッソに破壊され、その後埋め立てなどを行

って元に戻そうとしていますがそう簡単に戻すことはできないと思いました。それでも、徐々に環境は回復しているそうです。海産物の水銀値は正常域になっているので水俣湾の魚は安心して食べられます。相思社に泊まっている学生さんたちとの夕食交流会で、学生さんが買ってきて響の飯島さんがさばいてくれた鯛とあじの刺身が、とってもおいしかったです。



鯛とあじ（真ん中）の刺身

(3) 胎児性水俣病の患者さんとの交流

平野さんのはからいで、胎児性水俣病の患者さんとたくさん交流ができ、貴重な体験をさせてもらいました。

初日は居酒屋で患者さん3名と支援をされている方2名とお話できました。患者さんは、みんなとても明るくて、楽しくおしゃべりをしました。永本さんは、クレーンが好きで大阪にはクレーンがいっぱいありそうでいいなあとか楽しそうに話されました。話していて「明日、音楽祭があつて舞台に出るんだ～」と聞き、「エー！それはラッキー！」と喜び、次の日は、市民会館に「もやい音楽祭」を見に行くことになりました。行政が市民の「もやい直し」の一環として行っている行事です。来賓で来られた厚労省の方の挨拶は「???」と思いましたが、水俣病の方や障がい者の方たちの詩に曲をつけて音楽祭で発表するという内容はいいと思いました。永本

さん作詞の曲も、とてもよかったです。永本さんも舞台に上がって表彰されました。詩も素敵なのですが、詩に曲がつくことでさらに心に強く訴えかけていると思いました。これは授業でぜひ教材に使いたいと思いました。永本さん以外の患者さんの詩もぐっと心に響きました。平野さんと交流が深かった鬼塚さんも会場に見に来られ、鬼塚さんとは、音楽祭の後も患者さんの作品展を見に行ったり、買い物に行ったり、お茶をしました。鬼塚さんとの出会いもとても心に残っています。

胎児性の患者さんは、加齢とともに症状がだんだん重くなり、歩けていた方も車椅子での移動になったり、話す言葉がだんだん聞き取りにくくなったりしています。鬼塚さんの話が私は聞き取りにくかったのですが、一生懸命伝えようとされるし、初日の居酒屋にも来ておられた支援者の方（亀仙人の様な感じの人で埼玉から来ている人でした）が、それを聞き取って、鬼塚さんのしてほしいことに答えている姿に感動し、鬼塚さんの陽気な人柄にも、心が温かくなりました。また水俣に来て会いたいなと思いました。

(4) 水俣に移住してきた支援者の方々

患者さんだけでなく、水俣に移住してきて支援活動をされている方の生き方にも感動しました。相思社の職員の葛西さんも東京から移住してきた方でしたし、水俣市立資料館で語り部（伝え手）として水俣病を伝える活動をされている吉永さんも20歳の時に静岡から水俣に来たという話をされました。患者さんたちの居場所を作られたという方にもお話を聞きました。いろいろと苦労されている話や、とても丁寧に患者さんを支援しておられる話は、すごい！深い！と思うことだけでした。支援者の方のお話も中学校以上の子どもたちの教材になると思います。

(5) 「公害」を消す行政

その方から聞いた話では、水俣市役所の「公害対策課」という名前が「環境対策課」というように、行政から「公害」という名前が消されていると言うのです。「もやい音楽祭」での来賓挨拶は、どんなことを言うのか、しっかり聞いていましたが、きれいごとの挨拶で「水俣病」という言葉はたった1回しか出てきませんでした。それも「水俣病は環境問題の原点です」と言われました。「公害」と言えば加害の責任が問われますが、「環境問題」とすることで社会全体の問題、つまり国民の自己責任に問題をすり替えようとしている意図を感じました。



水俣病の被害は、当時の行政が想定していた以上に拡大していたため、できるだけ被害者を認定しないようにする対策がとられました。そのため、未だに名乗れない方や救済されない方がたくさんおられます。相思社では、そういった方々の相談活動もされています。相談員として水俣だけでなく全国にも行かれている永野三智さんの著書『みな、やっとの思いで坂をのぼるー水俣病患者相談のいま』がこの平野ゼミ合宿の必読文献で、私も読んでいきました。とってもいい本で、ぜひ多くの人に読んで欲しい本です。相思社の職員の永野さんにも会えて、お話も聞けてよかったです。

行政は、年々症状がきつくなっていく被害

者を水俣病と認定しないまま放置し続け、水俣病は終わったことにしようとしています。そのために、市民や被害者を分断してきました。それは、「チッソ城下町」と言われた水俣市だからでした。(葛西さんは「チッソ植民地」と表現されました) 水俣市内を巡って、チッソ関連の商業施設がありました。チッソ工場の周囲の海岸道路も市の予算でつけさせたことなどからもわかります。

一番驚いたのは、昔患者さん達がチッソ工場の正門横に張ったテントの下で、座り込み運動を続けていたその場所が、今はなんと「チッソの労働組合事務所」になっていたことです。元々は、チッソの労働組合は第1組合、第2組合があり、第1組合の労働者は、患者さんや漁民の運動を支援して一緒に闘ったそうですが、第1組合はなくなった(潰された)ということでした。残った組合はまさしく「御用組合」(江戸時代の「ご用だ!ご用だ!」)で、工場の正門前に建っていて、工場を組合が守っているかの様でした。そのチッソの正門近くの道路沿いの目立つところには、写真のような看板がありました。「水俣病」という名前を消そうとしていることにも唾然としました。

世界的には、水俣の様な水銀中毒を繰り返させないための「水銀に関する水俣条約」が2013年に採択され、2017年8月16日に効力発生しています。水俣で式典が行われ、水俣エコパークに記念碑もあります。日



本がこの名称でと提案し、もちろん日本も批准しているのになぜ？と問題の複雑さと重さを感じました。

(6) 慰霊碑でも人々を分断



胎児の形のモニュメント（胎児性水俣病でこの世に生まれなかった命もたくさんありました）

水俣市立資料館のある水俣エコパークの西の親水護岸の近くには、水俣病で亡くなった方の鎮魂のため、石で作った様々な形のモニュメントがありました。おこり地蔵のような感じのものもあれば、トトロや写真のような胎児の形のものなど様々でした。

その一角に千羽鶴がたくさん飾られ、広島や長崎とよく似た慰霊碑がありました。

この慰霊碑が出来てから、毎年ここで水俣病犠牲者慰霊式が行われるそうですが、この慰霊碑には沖縄の慰霊碑とは対照的で、亡くなった方の名前は刻まれていません。名前を書いたものは、ひっそりと中に入れてあるそうです。入れてもらえるのは水俣病認定患者で、申請があった人だけです。この慰霊碑が



できる前から、患者団体「水俣病互助会」による慰霊祭は、犠牲者らをまつる「乙女塚」（漁村地域にある）で行われてきました。水俣病公式確認の5月1日にです。その同じ日の同じ時刻に水俣市の慰霊式をここでやっているという話を聞いてどこまで、行政は被害者を分断するのか！と腹が立ちました。

2. 5年生での水俣病の実践から

(1) 水俣病学習で何を学ぶか

大阪からは遠く離れた水俣で、昔に起こったことを学級の子どもたちになぜ学ばせたいのかを考えました。学級の子どもたちについて気づいたことは以下の3点でした。

- ① 厳しい環境の子どもたち
- ② 人の痛みを深く受けとめられる、やさしい子どもたち
- ③ 受験のストレスで友達関係が悪化している

6月に病気の父親を亡くしたあい。あいに対するさりげない支えができる子どもたち。みんなに感謝しながら一生懸命がんばるあい。あいは、父の長期入院で家庭は崩壊状態で、学力でも課題を抱えていましたが、前向きで明るい子でした。あいの他にも母子家庭など家庭環境が厳しい男の子が3人。一見幸せそうに見える家庭なのに、受験勉強を強いられるが成果が見えず、親に叱られ友達にきつく当たっていたわかな。この子たちが特に気になりました。

水俣病の学習を通して患者さんや家族の人々や地域の人々、支援したり共に運動をしたりした多くの人々の生き方を学び、親子や友達同士の関係も、テストの成績だけで人を判断するような見方ではなく、もう一度人間関係を「もやいなおす」（水俣では船をつなぐ「舫（もやい）」から公害で切り離された人々の心をもう一度つないでいくという「舫直し」

胎ばんを有機水銀が通過した!

胎児性水俣病の智子さんのことをお母さんが「宝子」と言っていました。智子さんは魚を食べないのにどうして水俣病になったのか考えました。空気、水、ミルク、ベビー用品、母乳、お腹の中にある時になった、へそのをから水銀が行ったと次々意見が出ました。「空気が悪かったのならみんな死んでる!」「水もみんなが飲んでいるのになんで?」でも、どれもありません。お腹の中の赤ちゃんはとても小さい体も出来上がる途中なのにいろいろないきょうを受けると重い障害が残ってしまいます。ミルクはヒマミルク事件があったこと。ベビー用品や母乳も環境ホルモンが含まれているものもあって良くないものもあります。

智子さんの場合は「プランクトンが水銀を食べて、その水銀をためたプランクトンを魚が食べてまた水銀がこくなってたまっていき、その魚を人間が食べて水銀がだんだん体にたまっていった。」

「この子が食べた水銀を1人で吸って背負ってくれたとばい。それで私もその弟たちもみんな助かったとです。この子がわが家の命の恩人ですたい。」(良子さん)だから「宝子」と言って大事にしたんだとわかりました。智子さんはかなり重症の水俣病ですが下の兄弟達もお母さんもひどい水俣病ではありませんでした。

そして、もう一度理科の勉強にもどってたいばんやへそのをの役割を復習しました。たいばんは赤ちゃんに悪いものを通さない仕組みになって生命を守ってきたのに、と言うと「水銀は通してやる!」とだれかがさげんだね。有機水銀の他にもお酒やたばこや薬などの悪い成分も通してしまうことがわかってきました。「環境ホルモン」と呼ばれる化学物質もそうです。大昔にはなかったものばかりなんですね。それに、もう一つあります。「放射線」です。特に赤ちゃんの体が十分に出来上がっていない時は大変なことになります。

■感想

- ・いろいろわかってだから宝子さんだと思ったとです。泣けるとです。
- ・智子さんのおかげで下の妹や弟も水俣病にならなくてすんだ。
- ・有機水銀がたいばんをこしてしまっただんなでびっくりした。
- ・智子さんが赤ちゃんのときから水俣病になったのはお母さんのせいということになってしまふ。ショックだらうな・・・
- ・智子さんの方に全部行ってしまったけど良子さんは智子さんが自分やきょうだいたち

を守ってくれて感謝している。だから悲しい方に持っていくずいぶんの方にどんどん持っていくのがすごいなあ〜他の人なら悲しんだり申し訳ないと思うのに・・・
・宝子の意味がやっとわかった。この名前にはお母さんの思いやありがとうという気持ちでいっぱいだと思う。自分の食べた魚で智子さんをこんなことにおわせてしまって「悪いなあ。」という気持ちもあるかもしれない。でも自分の子どもたちがこんなにもたくましく生きてくれて周りの人にも協力してもらいそれでも幸せな家族だ。

■もっと知りたいこと・疑問

- ・なぜ有機水銀はへそのをを通ったのに無機水銀は通らないのか。
- ・赤ちゃんってふしぎだなあ。もっと知りたいです。
- ・たいばんのことを知りたい。
- ・赤ちゃんになんで(水銀を)送ってしまったんだろう。
- ・りょうこさんが平気なのは どうして?
- ・もうちょっとくわしく水俣病のことを知りたい。

☆感想や疑問の中からみんなに考えてほしいこと☆

1. 「智子さんが赤ちゃんのときから水俣病になったのはお母さんのせい」でしょうか? 「水銀が含まれている魚を食べた自分が悪い」という気持ちがあったかもしれないけど、よく考えてみよう。水俣病の原因は何でしたか? はじめの時間の知りたいことにあった

「いつごろから排水口の水銀を流さなくなったのか?」がヒントになります。静子さんや実子さんが発病したのは1956年でした。だいたい何年ぐらいだと思いますか? グラフを見て考えていきましょう。

2. 「なぜ有機水銀はへそのをを通ったのに無機水銀は通らないのか。」

この質問も大事です。有機水銀と無機水銀のちがいが、どうして有機水銀ができたのかなど、みんなの疑問であとにしようとおいていたことをくわしく考えましょう。そのほかにも「どうやって水銀を作るのか」「なぜ化学肥料を作ったのか」「有機水銀をなくす方法はないのか?」「有機水銀を食べた魚は約何分で死ぬ?」「有機水銀はどうして作るのか?」「有機水銀と無機水銀はどちらがうのか?」「水銀を体から出す方法はあるのか?」「水俣病はなおせないのか?」なども関係していると思います。

※大学で理科の研究をしていて化学のことをよく知っている大西真平さんに来てもらってみんなの質問について少くだけ話をしてもらうことになりました。将来理科の先生が小学校の先生を希望されているのでみんなといっしょに学びたいと意欲満々です。しっかり話を聞いて、また知りたくなったことをついでに聞いてください。

が使われている) ができたらと思った。

その願いを込めて学級通信「もやいなおし」を発行し学習プリントに書いた感想や疑問を掲載し、授業で読んだり、持ち帰って親子の対話に役立ててもらったりしました。

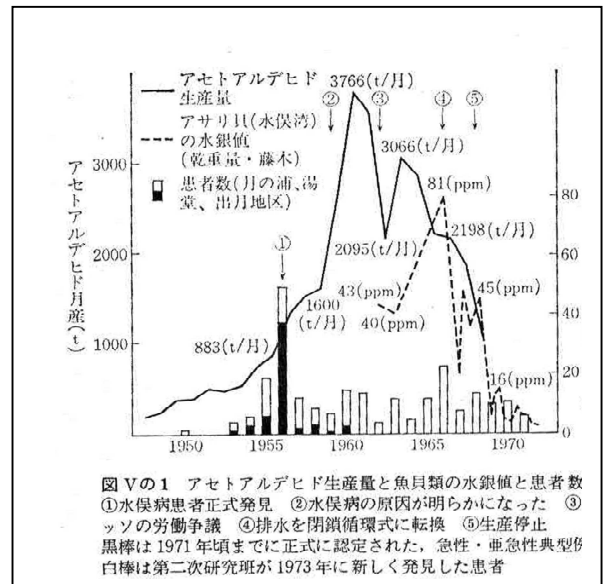
(2) 授業の組み立てをどうするか

健康教育の授業では、単元の導入に使う教材は子どもたちに合わせて慎重に選んでいます。1時間の授業が終わったら感想だけでなく「疑問、もっと知りたいこと」を書かせます。それをもとに単元の構想をおおまかに立て、毎時間の子どもの発言や感想を見ながら、教材を追加したり、入れ替えたりします。

導入の教材は、自分たちと同じ学年の子どもの話から入って親近感を持たせたいと思い、妹が発病した当時5年生だった綾子さんの講演録を選びました。(栗原彬さんの『証言水俣病』(3))綾子さん一家の話は、『水俣の赤い海』(2)にも詳しく書かれていますが、家族の語りの方がいいと思ってこちらを選びました。水俣病の説明は簡単にし、桑原さんの写真集(4)から「天女のような意識のない美少女」と解説されていたクミ子の写真を見せました。

クミ子と同じ隔離病棟に、講演録にある綾子さんの妹静子、実子も入院していたからです。

第1時に「いつまで排水を流していたのか」の質問があり、この答えを示すグラフも原田さんの著書(5)から見つけました。



図Vの1 アセトアルデヒド生産量と魚貝類の水銀値と患者数
①水俣病患者正式発見 ②水俣病の原因が明らかになった ③ツッの労働争議 ④排水を閉鎖循環式に転換 ⑤生産停止
黒線は1971年頃までに正式に認定された、急性・亜急性典型型
白線は第二次研究班が1973年に新しく発見した患者

水俣の裁判についてはどう教えればわかりやすいだろうか調べていると、クラスの子どものお父さんが弁護士で、その子が食物連鎖を学んで「弱いものが強く強いものが弱い」と書いていて、これはいけると思い「お父さんに水俣の裁判のことをどうわかりやすく教えたらいいか聞いてきて」と頼むと、「自主勉

強でしてくる」と快く承諾してくれ、後日お父さん自身が「水俣病と裁判」という大変わかりやすい解説文を作って下さりとても助かりました。それ以外にも私がこの単元で教えたいと考えていたポイントのほとんどが子どもの「疑問」として第1時の感想に出ていたのでそれを構成して授業計画を立てました。

水俣病の原因を学んでいくうちに、子どもたちの疑問が「有機水銀と無機水銀はどう違うの?」「どうして有機水銀は脳にいったの?」「化学肥料って何?」など化学分野に集中し始めたので、学生サポート制度を利用して、化学の得意な大学生の力を借りました。彼の授業サポートは思いもよらぬ効果がありました。特に**あい**と**みずき**に学ぶことの楽しさを教えてくれました。

(3) たっぷり学ぶと動き出したくなる

水俣病の原因やチッソとの関係、胎児性水俣病、裁判、チッソ城下町、舫い直しの取り組みなどを子どもたちの疑問を組み立てながら学びました。子どもたちは、真実を知りたいと思い、知りたいことを学ぶことに夢中になっていきました。名古屋の二硫化炭素公害の住民運動で語られた「公害解決の力は科学に武装された住民自身の運動しかない。住民の怒りが科学的認識に武装されたらもはや何人も崩せない」の言葉を思い浮かべました。

学年全体で環境問題学習の発表会をしようということになり、水俣病で学んだことを発表し合うことになりました。**わか**なのグループは、発表に向けて学校中の先生や校務員さんに「水俣病を二度とおこさないようにするためにどうしたらいいですか?」とインタビューをして新聞にまとめ、**あい**も誘って「仲よし小学校」という劇を発表しました。

「私が思った感想・仲よし小学校」 あい

私は、**わか**さんと**ちひろ**さんと**あやか**さんと**ゆきこ**さんといっしょに劇風にして水俣病のことを学びました。大西さん(大学生)が来てくれた時も

よくわかった。私たちは、「水俣病をくりかえさないためには?」というやつにしました。わかさんとあやかさんが「いっしょにしよう。」と言ってくれました。とてもうれしかった。題は「仲よし小学校」です。わたしのやくは、「あほ」のやくです。げきの練習もりハーサルも楽しいです。この劇で4人と、もっと仲よくなれたように感じます。この「仲よし小学校」って言う題は私にぴったりですね。私はこんな友達が大好きです。水俣病や有機水銀の事をもっと知りたいです。

みずきの家庭も母子家庭で苦勞の多い環境で、学力面でも厳しく、いつもは授業になかなか集中できないのに大西さんの授業には身を乗り出して聞いていました。毎時間の感想にも最後のレポートにも次から次と浮かんでくる疑問を書いていました。

「もっと聞きたいこと」 みずき

大西先生がきてよくわからないところもあったけど、楽しかった。ぼくが質問したときもすぐに教えてくれました。もっと知りたいことで、ぼくはスズのことや草のねっこに有き水銀があたるとどうなるのかも教えてくれました。今教えてほしいのはありません。また来てください。あっ思い出した。聞きたいことあってんや。セロハンテープに有機水銀はつくの? 鳥も有機水銀をたべているの? 鳥は有機水銀が体にまわるとどうなるの? 今の体温計は水銀が入ってるの?

子どもたちは具体的な事実を通して、環境を汚すと人に被害を与え命まで奪うことや、「毒は薄めても危険」なこと、正しいことを知らされていないから被害者も辛い目にあい、被害も拡大したことも学びました。

まさのり、**うしお**、**みずき**のグループは裁判をテーマに選び、水俣病裁判の判決文を調べていました。難しい文章を「これ何て読むの? どういう意味?」とひとつひとつ丁寧に読んでいけるのには感心しました。3人とも漢字は苦手でした。難しい漢字をひらがなに直

して書くと、今度は意味がわかりにくいので、また漢字に書き直してふりがなをつけました。まさのりは6年生も担任しましたが、社会科で裁判の学習の時に突然「水俣病って最高裁までいったよなあ？」と発言したので驚きましたが、この時の学習が生きていたと気づきました。

うしおは、ふだんはなかなか作文が書けないのがんばってこれだけ書きました。

「水俣病を学習して」 うしお

水俣病はどうやってなるのかよくわからなかったけど、「もやいなおし」(学級通信)やなんかのプリントとか先生に教えてもらって食物連鎖でなったというのがわかった。なんでチッソ工場がそのはい水で水俣病にかかっている人がいっぱいおるのにやめへんのか。何で人よりお金をとるのがわからない。なんではい水を流すのをやめなかったのかを知りたい。チッソはい水を流すのをやめたら人は助かるけど、何ではい水を流し続けてお金をもうける方をとるのか。自分だったら、自分のせいで友だちとかが病気になったら裁判とかされたらいやだからぜったいにしない。

(4) 鉛筆対談を親子や友だちと

子どもたちは、自分の意見が学習で取り上げられてみんなで話し合ったり、学級通信を読んで仲間への認識が深まったり、仲間と発表に向けての取り組みで対話して学び直し、それをまた家で家族に伝えるという中で人間関係が「もやいなおし」されていきました。

全員のレポートをまとめた文集を持って帰らせました。その文集や学年の環境会議を話題に親子で鉛筆対談をしてくることを宿題にしました。うしおが次の日の朝一番、うれしそうに「お母さん、水俣のこと書いてくれてん！」と見せてくれました。うしおは、母子のコミュニケーションがうまくとれていなくて、学習面でも生活面でも育ちそびれていました。えんぴつ対談ではなく、お母さんが一

人で書いてくれたものでしたが、事典で調べて一生懸命書いて下さいました。鉛筆対談の例を紹介します。

お父さんに質問

私：この「水俣病を学習して」を読んでもらって思ったことや感じたことはありますか？

父：なぜ水俣病になったのかみんな理解している。

私：みんなの文章を読んでいてどんなことがわかりますか？

父：化学の発展のためにつみのない多くの人たちをぎせいにした。

私：水俣病をくり返さないために心がける事とはなんですか？

父：お金もうけのことばかりを考えずに人の命をまず一番に考える。私は、もっと相手のことを理解して世界中の人々みんなで分かりあってほしいと思います。

私：いろいろな意見をありがとうございました。

(5) 健康教育で社会の仕組みを学ぶ意味

教材選びの段階から、子どもたちが自分たちの問題として考えるようにと考えて、一般的な「水俣病患者」と見るのではなく、具体的に「患者の〇〇さん」と、その方の生活を想像し、生き方に触れて学ぶようにしました。子どもたちは、感性豊かに想像し、導入で読んだ講演録に出て来た実子さんが今どうされているのかを気にして、毎時間まさのりたちが「先生、実子さんは、今どうしてるの？」と尋ねてきました。メールで水俣の相思社に消息を問い合わせると返事をくださり、それを学級で報告しました。想像力を働かせ、遠くで起こっている問題でも自分の問題として考え、人の悲しみや喜びに共感する心が耕されていったようでした。みずきは、水俣病が自分の生活と関係があると思ったとたんに授業に主体的に参加し、どんどん疑問も出てきて大学生にたくさん質問をし、友だちと発表に向けて対話し、最高裁の判決文まで書き写すことをしていました。事実関係を丁寧に学

ぶことで社会的背景も見えてきて、こんなに一生懸命生きている人の命や健康が大事にされないことへの理不尽さを理解し、「経済よりも命が大事だ」ということに気づいていきました。

彼は、他の教科ではつまずき、家庭環境も厳しい子でした。みずきは家で、「水俣病の実子さんのことを調べてほしい」と母親に話して一緒に文献やネットで調べたと、後に母親から聞きました。その2年後、たまたまみずきの弟も5年生で担任し、水俣病を学習しました。すると家族でまた水俣病の話題で盛り上がったと聞きました。

私は、ヴィゴツキーの「社会的本能」という言葉に出会って「社会性」も「本能」であるという考え方に感動しましたが、健康教育の「対話の授業」は、「社会的本能」を昇華させる取り組みだと思いました。子どもたちが授業で、仲間や親子の関係も紡い直しながら学んで生まれたエネルギーが社会変革の方向に向けられ、自分自身の生きる力にもなっていくのだと思いました。

（6）青年になってからも対話

水俣の授業から4年もたって突然、教え子から手紙をもらいました。「小学校で習った水俣病やタバコの学習が中学校でも役に立ちます」と書かれていてうれしくなりました。健康教育の授業が心に残っているだけでもうれしいのに、それが役に立っているなんてすごい！と思いました。この子は5年、6年と2年間担任した子で、お父さんに裁判の解説を頼んでくれた子でした。

2014年1月、この子たちの成人式に出席し、久しぶりに会った時に、何も聞かないのに向こうから「先生、水俣のことちゃんと覚えてるで。一番後ろでちゃんと聞いててんからな…」と声をかけられてとても嬉しかったです。昔の記録ノートを見ると、導入の授業でいち早く問題の本質をキャッチし、「工場は

いつまで排水を流していたのか」と書いていた子でした。最後のレポートにも「…なぜ体に悪いと知ってても流したのか？…工場が流した水銀が原因だとわかって裁判をおこして最後に国と工場がお金を払うことになりました。ぼくならお金をもらっただけでも国や工場をゆるすことはできません」と深く考えていた子でした。20歳になっても覚えているなんてすごいなあと思いました。

健康教育の実践に取り組むといつも「人の命や健康よりも経済の発展や金儲けが優先される社会であってはならない」と思います。そういう私の思いは子どもたちに、語りませんが、社会の真実を見抜き、人の命や健康が大事だと判断できる社会人になってほしいと願いながら実践をしてきました。成人式での教え子との再会で、健康教育実践が社会を変える小さな一歩になると確信できました。水俣病のような健康教育で、子ども・親・教師がつながり、共に力を合わせて社会を変えていく連帯感が生まれていくような気がします。健康教育の授業は「歴史の進歩に貢献」（小川太郎氏⁽⁷⁾）できるのではないかと思います。

3. 発達研究と子ども理解

（1）ヴィゴツキーの発達論

健康Pで、2004年からヴィゴツキーの『「発達の最近接領域」の理論』を学習し、2009年10月からは『教育心理学講義』『障害発達論集』を学習し、現在も毎月第1水曜に『思考と言語』を学習しています。

ヴィゴツキーが子どもたちの可能性をどこまでも前向きに論理的に論じている文章を読み、自分も前向きに物事をとらえられるようになりました。

ヴィゴツキーを学習していると、健康教育で大切にしていること、健康教育の実践をして感じたこととびたっと繋がる言葉によく出会いました。私の好きな言葉の1つは「子ども

もが学校に在籍すること—子どもの全面発達の道具となる(8)p80」です。厳しい家庭環境の子や発達に課題のある子どもも含めていろいろな子どもが学校に在籍していること自体が大事だということだと思います。同志会流に言えば「異質共同の学び」が、お互いを発達させるということでしょうか。

(2)「発達の最近接領域」

「子どもが学校に在籍すること…」は、「発達の最近接領域」との関係で述べられています。「発達の最近接領域」とは、「今日子どもが他者の助けを借りてできることは、明日には自分でできるようになる(8)p65」「今は、子どもにとってまわりの人たちとの相互関係、友だちとの共同の中でのみ可能であることが、発達の内的過程が進むにつれて後には子ども自身の内的財産となる(8)p23」と述べています。

すぐに思い浮かべたのが学力テストでした。自分一人の力で文章を読み、答えることだけが「学力」と考えられ、学校現場は点数を上げることの圧力が強くなっています。でも、「発達の最近接領域」の理論を読み、他者の助けを借りてできることやいずれできるようになるであろう明日の発達水準を思い浮かべることが教育では大切なのだと気づきました。発達や家庭環境、人間関係につまずいている子どもたちは、孤立しがちで学校に居場所を見つけられなくなっていますが、そういう子どもたちが、健康教育の実践で学級集団の「発達の最近接領域」を広げる役割を果たす場面を何度も見ました。

水俣病実践のみずきやまさのりたちもそうでした。様々な意見が、みんなの「最近接領域」を広げていったと思います。ヴィゴツキー『「平穏な児童期」に砂糖をまぶし、ばら色の水で教育課程を甘くする教育学はすべて私達のものではありません・・・教育の最大の原動力は、飢えや乾きが生存の闘争の激励者であるのと同じように、児童期の暗黒

面であることを私達は知っています…それゆえ教育は、本当に『困難な』児童期の厳しい特徴をばかしたり、ごまかしたりしないで、子どもがそのような困難とできるかぎり激しく、何度でも立ち向かいそれに打ち勝つようにすべきです(2)p290」の言葉が語っているように、厳しい環境にいる子ほど、健康教育のような現実社会の問題には敏感で、熱心に学習し、競争ではなく仲間と学び合ってたたくましく育っていきます。それは「正しく組織された教授・学習は、子どもの知的発達を先導し、教授・学習の外では概して不可能な一連の発達過程を生じさせる(8)p23」からだと思います。

(3)「生活的概念(自然発生的概念)」と「科学的概念」

健康教育の授業では、算数や国語の授業ではほとんど参加させられない子も、塾に通って受験学力が高い子も同じスタートラインに立って学習できることを実感しました。計算も漢字も苦手な**だいき**が、普段は参観に来てと催促もしないのに「環境ホルモンの授業見に来て」と言い、自主的に動き出した劇では、環境ホルモンについて説明する一番長いセリフを一番早く覚えました。この変化はどうかを考えていくと「生活的概念(自然発生的概念)」と「科学的概念」の関係がわかってきました。ヴィゴツキーは「科学的概念の語義は、生活的概念を介して豊かに、そしてリアルになり、生活的概念は科学的概念の習得を通してより意識化されたものになる」「自然発生的な生活的概念と意識的に習得される科学的概念のくいちがいが発達の最近接領域になる(8)p154」と述べています。**だいき**の場合、算数での科学的概念の習得は生活的概念と結びつくことはほとんどありませんでしたが、健康教育では、学校で学習した科学的概念が生活的概念と結びつき、思考を促し、学ぶ意欲をおこさせ、科学的概念をどんどん学んで

いったと思います。その結果、生活を意識的に見るようになり母親に忠告するまでになり母親を驚かせたのだと思います。水俣病の授業で、これは自分の生活と関係があると思ったとたんに授業に主体的に参加し、どんどん疑問も出てきて深く学び、友だちと発表に向けて対話し、難しい判決文まで書き写したみずきやうしお、まさのりたちも、生活的概念が呼び起こされる教科内容での「対話」が、発達の最近接領域を創造したのだと思います。

(4) 社会的本能

健康教育は社会の構造を知る「どこでもドア」になると榊原氏が主張されました。ヴィゴツキー学習会では「社会性のある人とは、変革できる人ではないか」との大津さんの発言を聞いて、健康教育で取り組んでいる「対話の授業」は、「社会的本能」を昇華させる取り組みだと思いました。

健康教育で身近な生活の問題とつなげながら「科学的概念」を学んでいくと、「生活的概念が下から上へと発達」し、社会の仕組みが見えてきます。すると子どもたちは素直に「社会をよりよく変えたい」、「自分たちにも何かできることがあるはず」と、様々な取り組みを考えて動き出しました。環境ホルモンの授業では、「身近にあるあやしいプラスチック容器探し」に始まり、家族との対話でまず自分の生活を変えたいと思い、まわりに伝えて、人類を環境ホルモンから守る為に劇を演じたり、パンフレットを作ったり自分のできることをし始めました。何をしたいかわからず遊び出す子もなく、みんなが勝手に動き出していました。これは、子どもたちの「社会的本能」が呼び覚まされたのではないかと思います。授業のまとめとして、よく親子や友だちとの「えんぴつ対談」をさせていますが、これも「社会的本能」を昇華させる活動だと思います。

また、いわゆる ADHD のタイプの子によく

出会いますが、ヴィゴツキーを学んでからは、この子は「社会的本能」を素直に表現しているのではないかと考えるようになりました。自分の席に座ってられず、すぐに友達の所に行って友達とくっついていたいという行動をとるために学級の一斉授業にはなじみません。でもその子は、遊びの中では少々強引だけれどもリーダー性を発揮し、生き生きと活動し、思考し、子どもたちを組織していました。授業に「遊び」を入れて工夫して「学ぶ」ことをつくることも大切だと学びました。「遊びは、本能教育のもっとも貴重な教育手段(6)p55」「遊びは、社会関係の明確化、琢磨、多様性を教えます。・・・運動の社会的調整を無限に多様化させ、柔軟性、弾力性、創造的能力を教えます(6)p55)」を読み、授業の中で科学的概念を生活的概念に結びつけるためにも「遊び」の要素が必要だと思いました。6年生の「新型インフルエンザ」の授業でも、免疫やワクチンの仕組みを劇にして解説しました。劇にすると難しい概念も子どもの印象に残り楽しく学習できました。

(5) 教師は環境の調整者

健康教育の授業では、「発達を先導する教授・学習」にしていくために、子どもたちの実態を把握し、何が課題なのか、この教材で何を教え、どう変わってほしいのかななどを自分1人で考えるのではなく、同僚や研究仲間などと対話して教材研究をしています。ヴィゴツキーは、「教師の役割は、環境を組織することと、規制すること(6)p29)」「教育過程では教師はルールであって、運動の方向だけが決められており、その上を車両が自由に自主的に動くことのできるようなものでなければなりません(6)p26)」と述べています。教師は「書物、地図、辞書、友人の代わり」ではなくて「環境の調整者」でなければいけないと。健康教育の授業づくりで「**Think Globally, Act Locally**」「未来への展望の持てる教材」を重

視してきました。子どもたちは、未来に希望を抱き、世界にも関心を持ち学ぼうとしますが、未来に展望が持てる教材を提起しないと「注意」を向けられなくなってしまいます。エイズの実践で、命に関わる問題に目を向けるのが辛くて「エイズの勉強いやや」と訴えていたりょうやは、文章表現が苦手な子でしたが優しい子でした。「LAP (HIV感染者をサポートする NGO 団体) のシミズ君」「少女イヴ」と「ジョナサンくん」など未来へ展望を持てる教材を提示すると子どもたちの「構え」が変わっていきました。「私は思春期が長いと思う」と表現し、親の離婚で悩み、投げやりになっていたはるかが、「エイズは、病気やない！…ただ、薬をのまないといけなだけや！…私はできれば LAP に入りたい…」とまとめを書き、卒業式には「お父さん、お母さんに恩返しをしたい…」と決意表明をして輝いて卒業しました。

「教育過程はきわめて複雑な闘争(6)p34」「柔和で穏やかな波乱のない過程として理解してはならない(6)p34」を読んで私は、学校は困難なことが多いが、仲間と共に困難の元を解き明かし、矛盾の中に発展の原動力を見つけ、学び合って乗り越えていく取り組みが大事なのだということではないかと思いました。教室が静かで管理が行き届いていることがいいと思われる傾向が強く、教師も子どももがんじがらめにされ、のびのびと子どもと関わり、子どもとの対話を楽しむ余裕がなくなっています。だから、ヴィゴツキーのこの言葉に励まされました。毎日毎日、色々なことが起こりますが、教師も健康教育で仲間や同僚と対話し、授業を通して子どもや親や地域の方などとも対話をしながら最近接領域を広げ、「環境」を調整していくと、子どもたちの「ダイナミックで活発な活動」やびっくりするような成長ぶり、優しさ…に感動し、この仕事に生き甲斐を感じ、また次の実践がやりたくなくて、仕事を続けられるのだと思います。

(6) 人は何歳でも発達する

「90歳に達するまで新しいニューロンが絶えず発生している—今年3月科学雑誌『ネイチャー・メディスン』に掲載の論文—」

「脳も、筋肉と同様に鍛錬することで衰えを防ぎ、活発な状態を維持できるという希望の持てる話」(『学習の友』9月号)を読み、私たちも発達するのだと展望を持ってました。

ヴィゴツキー学習会には、ベテランから若手まで様々な年代、学校も小学校、支援学校の同志会員の他、色々な方が来られます。元小学校教員で、『思考と言語』の翻訳に関わった方や他の民間サークルの方、ヴィゴツキー学協会の幹部や大学院生など新しい風を吹き込んでくれる人もいます。作文教育の土佐いく子さんからは、「行きたいんだけど残念。『思考と言語』は少しずつ読みノートに書いています」とメールをもらいました。学習会は、月に1回、細々と続けてきましたが、理論的に支えてくれる榊原さんの存在があり、場所を提供してくれる黒井さんのおかげで続けてきています。人は、何歳でも発達すると思いますが、仲間と最近接領域を広げる学習はより発達させると思います。

【参考文献】

- (1) 原田正純「金と水銀—私の水俣学ノート」講談社・02.2.
- (2) 原田正純「水俣の赤い海」フレーベル社.86.5.
- (3) 栗原 彬「証言 水俣病」岩波新書 2000.2.
- (4) 桑原史成「水俣の人びと—母と子でみる—」草の根出版会 98.6.
- (5) 原田正純「水俣病は終わっていない」岩波新書 85.2.
- (6) ヴィゴツキー「教育心理学講義」新読書社、2005.8.
- (7) 小川 太郎「教育と陶冶の理論」明治図書、1963
- (8) ヴィゴツキー『「発達の最近接領域」の理論』土井捷三・神谷栄司訳、三学出版、03.7.